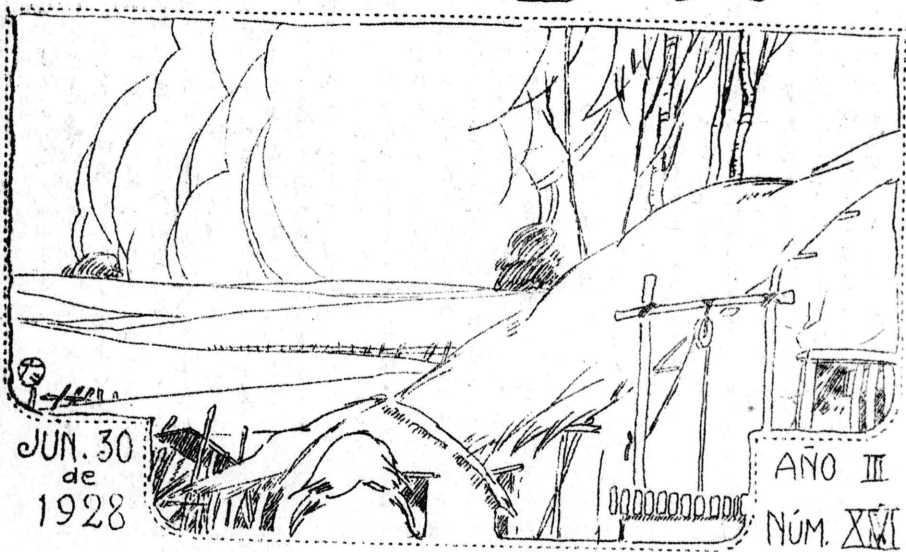


美  
拾  
六  
號

SUPLEMENTO LITERARIO  
"EL ARGENTIN DJIJO"  
報時丁然尔亞  
錄附藝文

美  
參  
卷



JUN. 30  
de  
1928

AÑO III  
NÚM. XVI

# レ・ミゼラブル

グイクトール・ユゴー 作

一八二五年十月上旬、秋夜水かきある日の暮つ方、湖から歩を続けたジマン・ヴァルジマンは空腹と飢渴と疲水とにせめられ水ながら、小さな淋しい、グイクトールの町に辿りつた。彼は何より先に旅券を町役場に差出してそれ水に署名を求めねばならぬが、彼の懐へた黄色い旅券は忽ち田舎町の人々に彼が前科者であることを知らせてしまった。その為には宿屋で水、酒場でも断はられ、何處を訪ねても彼に水一杯をせよと悪む者はあつた。日はとつぷり暮れ果て、アルプス下しの寒風は兎もほろしい、彼は怒故かく吹いて己が犯した罪のためと言へば誰一人相手にしてくれかねと怨み入るゑかたであつた。空腹はつゞまらず、夜と共に寒さはぬはる。水かきる彼は全く途方に暮れて空にまた、く星の光りも眺めつ、青い息を吐く外あつた。世には神もかければ佛もかゝる、その人が一度人間の社會で罪を犯せば前科者だととへんか、悔ひ改めようと世の中はさう容れなく水かきだ、腹がへつた、併し人の物を盗み食ふひさへか、い、彼がこんなことを考へかぶらるへてゐると一人の婦人が通りかかつた。ヨミエル僧正の家に行つて見せよ、やさしい婦人の声、彼の耳に入つた時、彼の心は喜んだ。涙を流し、はかりに婦人の好意を謝した。ジマン・バルジマンは綿の様に水かき切つた身を起して、寂へられた僧正の家の方へ足を運んだ。彼の心にはやさしい、神々しい僧正の姿が描かれて淋しい笑が

その口からとれるのだった。——  
僧正の宅では老練バツテイスと名使マダロアールとが晚餐の仕度をしめて僧正の壽を祝してゐると僧正が静かに這入つて来たので急ぎに話をして、今日明で聞かぬ来た前科者のことを話して出た。二人の女は氣味悪そうに顔をしかめて服と襟を眺めて居ると僧正はぬから這入水と言ふと驚かぼうと、と、した、答へ、人の悪い汚い男がよろめさかぼうと這入つて来た、そしていさかり自分はジマン・バルジマンで町も道はれた者だが今夜泊めてくれ、食券まで出して過去の恐ろしい程度まで貞とに物語りこの世に捨てられ前科者でと、泊めてくれるか、と、念を押し、僧正は無言のまま、軽くうかきか、が、う、ジマン・バルジマンをねんころに食卓に就かせて温かい食事を與へ、手を握つて、と親切な言葉、菜と、此處に在る物はみんな貴方の物である、貴方は私の兄弟の、だ、と、言ひ、彼に命を命する。ジマン・バルジマンは、私は十九年間この方籠台に居たことはありませぬ、貧困の爲に一定のパンを盗んだのが元で十九年間、と、言ひ、暗い淋しい牢獄生活を送らねばならぬ、彼を境邊におりました、そして獄を出てから貴方の様にお親切か、人に接したことはありませぬ、と、過去に思ひ出に身震ひしか、が、う、語るの、と、あつた。彼の物語りを、だ、まつて、聞いて居た（次頁へ）



# REQUEM

## 美都三作

どんよりと灰色にたがなる雪の空と  
チラ／＼おまみなく降り粉雪に  
包まれたウイリアムの街に、螢火の様  
な燈がソッ、ソッとほほほと  
のびて、一陰気な屋根裏部屋  
はレン・ミカエルの墓穴の様、物  
凄くさへ思はれた。  
たつた一本、淋しく立てられた蠟燭  
の炎、光は部屋中の影を黒々と  
照らして、壁に無気味な姿をな  
よ／＼と浮かび出させる。  
「さあ、愚者の會議は……」モ  
アルトには、一語、言へば永劫  
に寂れ切った天才作曲家ウオルフ  
ガング・アマデウス・モーツアルトには、  
尚更、物凄く思はれて、小大り切っ  
た神經を、う／＼させるのだ。  
「コック、コック」。誰か扉を叩く。

この言葉が、しつくりと当てはまる  
程全身真黒な訪問者だつた。  
ヒンと立って黒マントの襟と袴  
の黒い帽子と、周から蒼  
白い顔と、やに丸る眼が死の燈  
さきひつてのぞいて居る。  
モアルトは「ソッ」と後へしやる。  
訪問者は音もなく部屋の奥に進み  
リ沁む。そして暫くは息が止まる  
様な沈黙の静けさが流れてきた。  
やがて美しくした皺枯声が、謎の男  
の口から先づ洩れた。  
「モーツアルトさん、おしは作曲を  
んだに頼みに来たのじやが……」  
「ソッ」と部屋に下つた作曲  
は無言で両手を振る。  
「曲は、幾も幾も……」  
「うう。我輩は、おまみ……」  
「さあ、男の聲は押へつける様に、  
と挽歌そのもの、様にモーツアルト  
の頭を、かき廻す。  
「お禮は千五百ク、ウズレ、……  
よ、かな。頼みました。三通、肩  
は又来やう。」  
相手の返事と肩が、自分用件  
の背筋に話すと依頼者は姓名を往  
向と謎のま、残して風の如く去つた。  
明け放たれたま、の戸口から流水心む  
冷い夜風に、燭はジーンと音を立  
て、横になびいてゐる。「(終)」

## 文藝春秋

### 新宅生

自然のめぐりに春夏秋冬があつて様  
々の趣がある様に文藝思想の流れはこ  
各時代と共に色々の推移変遷があ  
つて面白。  
古典派から理想派、浪漫派、新感覺  
派へと移り行く間に色々の異つた主  
義が入り混つて、齟齬のあること、各  
ものは秋ある自然にひたひた。  
現代日本に於ける文藝思潮はフランス  
革命前時代の彷彿たるものがある  
と言はれてゐる。そして作品は作者の突  
感、意識、生活のありの儘、大體正  
直に發表するものが喜ばれ、  
と言ふ。即ち生活即藝術といふのが  
現代日本の文藝思潮の句だと言ふ。  
文藝はと、多田の時代……必要  
とされ、野蠻人の社會……  
後ではあるが、民謡……一種の文藝が  
ある、それはかくあるべき人生を、あ  
らに見せてくれ、又はかくあらねば  
ならぬ人生の方向を、示してくれるこ  
は、文藝の力に依つてこそ、  
かう。

(前頁二段よりつづく)  
それから一週程過ぎた或る日  
モツアルトは病み上りの夜に切つた  
た自身を妻のコンスタンタスにさ  
えられながら、程近い公園のベン  
チに腰を下した。やがて来るべ  
き春の先陣は、其処此處の枯草  
の間や、街路樹の梢に見出さ  
れ、水気石の夜以来、夜となく盡  
となく彼の心を苦しめた。黒マン  
トの男の姿をさへ、いつとなく  
忘れさせた程、あたりは長閑だ  
った。

そして二年越の病に疲れ切つた  
彼が、うとくと、朝露をこして、  
忽ち天の一角よりせと美くし、音  
樂が響いて来る。  
優雅高尚で、あゝ何となくしに  
夜調を帯びた、伽藍の如く、  
妙声は谷川のせ、うぎの如く、  
冷切れ途切れ、いつ迄と響く。  
鐘魂樂だ。ムックと跳ね起  
きたモツアルトの心は生き、  
輝き、やがて心せくまに、ベンチ  
の上へスルクと樂譜を書いた。  
今宵彼にとつては、黒衣をまたう  
謎の男と念頭にない。  
唯、鐘魂樂の作曲、それだけが  
彼の全部を支託してゐるのだ。  
それから後夜と書くと彼は夢中

になつて、その完成を急いだ。然し  
悲しいことには、鐘魂樂の完成が  
遅くとも、彼の病勢を段々悪ん  
で行つて再び床に就かば、もう全  
くなつた。そしてモツアルトが未だ  
の鐘魂樂のことは、かろい思ひ  
ながら、幾日か過ぎた或る夜、  
丁度あの危れるところから、程恐  
ろしかつた男の夜から三週間の夜  
一約束通り、黒マントをまとつた謎  
の男は再び彼の屋根裏部屋を  
訪れた。  
恐怖の記憶は病の爲めに大り切つ  
た彼の心によみがへる。  
そして曲が未完成のため、他日を約  
して歸つた謎の男の無意味な逢は  
最早やモツアルトの心にしつかり、喉の  
心んぞ、益々神経をいら立たせるばか  
りだつた。  
いつか木々が緑の衣裳を着る春が来  
て、陰鬱なウイーンの街は晴々とし  
て来たけれど、彼の部屋のみは、相  
変わらず墓場の様に淋しい。  
忠実な妻コンスタンタと弟ジエスマー  
の心をこめた看護の甲斐もなく、  
彼の病は日増しに悪化して行く。  
殊にあつた黒衣の男が訪れること  
に、モツアルトは、可憐なモツアル  
トは、いつしかあの謎の男が、  
使者一死の使ひだと思ひ、  
む様になつた。(後頁一段よりつづく)

在座同社社會にその昔から文藝が  
あつた、日會の誌に、かつては文藝と  
歌兒と、衣子夫人に依つて、オムツ  
共氏に依つて、アウシアと、ふ文藝同人  
雜誌が發行されて来た時代であつた。  
押多新聞に、セ子、雲水、折慶、  
共氏に依つて、旺んに文藝欄が賑つ  
た頃であつた。  
そして同社社會の文藝界にも、  
あつた。セ子氏こそ、今でも折慶筆を  
とつた、折慶、雲水、雨氏の如き、何れ  
も往年の面影はない、週刊の一時、  
かんに歌や俳句や漢詩が出てゐたが、  
今では見られなくなつて淋しい。  
同社に行雲抄を書いてゐる鏡懸は  
石井衣子夫人だと書はれてゐる、その  
貞徳は我々の知るところではないが、  
若し果して然りとすれば、衣子夫人亦  
老ひたりの感なきを得ない。  
時報に、こかつては、毎号一頁の文藝が  
あつて、様々な人に依つて、色々な作品  
が見られた時代があつたが、今はあ  
つて居ない。  
その後、時報の文藝附録が生れて、同  
人七子、マツ、珠、角笛、在、美、都、三  
胎兒、照、三太郎の著者に依つて、  
一時中々、さかんなものであつたが、  
今は寂れた。

(前頁第二段よりつづく)  
 黒衣の男は依然として嵐の如くに訪  
 れる。終にモツアルトは誰かに告を  
 まさ水たといふ信念に苦しめられ初  
 めた。然しその間にも彼は鎖魂樂  
 の事を忘れず、弟ジェスマーに指圖して  
 やがてそれは完成された。彼自らの挽  
 歌として……

さうだ。何故ならそれから間もなくこの有名な作曲家、ウオルフガング・アマデウス・モツアルトは世を去り一期として死んだのだから……

悪くこの話も……打ち切つたら読者諸兄は世に……恐ろしい怪談……美都三の作り話だと思はれるだらう。

実際モツアルトの幻想の如くに黒衣の男が死の使ひまであつたなら余りに怪奇的な物語なのだから……然し史実に依るとこの黒マントを纏つた謎の男こそフォーンワルホフ伯爵その人で、彼はモツアルトの鎖魂樂の音響を取つた後、自分の名前を發表しやうとしたのである。勿論彼がその計畵に成功した一躍、社交界の寵児となつたであらう。彼はモツアルトの墓に心から伯爵の失敗を祝福する。そして最後に若くして死んだ天才の菩提の爲に再び心からなる

REQUiem (鎖魂樂) の詞多  
 かり筆を擱く。

詩 小鳥の囀り

てつ弥

今朝も  
 さまじいワゴのワラに  
 みそくに  
 白く小鳥の囀るを見る  
 僕が  
 未だベッドに夢見てる間に  
 小鳥の囀  
 大の朝の日は水も捨て行くのだな

今朝も  
 さまじいワゴのワラに  
 あそくに  
 だが、小鳥の囀るは、ええ居る  
 昨日朝のあまりの  
 余分に血に流して置いたのさ  
 僕は  
 そこで  
 くちくち、微笑き減らち



冬枯の様な淋しい文藝界で、フ  
 郎氏は独自の詩境を生きてきた  
 た作品を見せつけてくれた。

一方、五箇の農業青年誌は若人の  
 手になつてゐるだけに相当地の情  
 のこつた文藝物が見えるのはう  
 れしい。

詩人の五箇独立紀念号に発表され  
 た詩人五人の詩は女性の流麗な  
 詩情が溢れてゐて嬉しかった  
 かく例外はあるにしてもその大體か  
 う言つて良選えのみちを辿りつ、  
 ある感じのある在野邦人文藝界  
 で近頃耳新らしいことききた。

それはかつては自らアカリつて出  
 して居た横浜氏が週刊紙第八  
 十号八頁の『在野邦人と邦文新聞』  
 とつて一文中で「文藝は自己満足  
 のためだ」とか下りない文藝記者  
 とした様なことを言つて文藝の  
 畑に志士の迷筆を投入して居らる  
 ことである。

氏の脱線文は今に始つたことではないか  
 う別の一文を反駁するだけならば又  
 反駁する必要を認めぬが唯文  
 藝を回して下らないと評しきう  
 (少)

詩

てつ弥

冬でう寒い冬でうネ  
ボカボカした此の頃の冬の陽光に  
会したやうに急に虚相が色付いて来  
ました。

いつとひつそりして姿と見せぬ小鳥  
連までが樹々の間の日向ぼっこに  
盆にお喋りもやります。  
いかにと晴れやかならぬびりした  
しそんな彼等の會話に——ただ  
僕だけが独りぼつちと言った氣に  
なつて了ひます。

何故この人間だけがかまひに窮乏  
なのませう、我等を自然より遠  
ざけやうとする文化のさきの時妙  
にはかなく感じました。  
ひかうびたそしてあわたたしい人  
生です!!!

フニオー一九二八  
——  
テイダレにマ

児氏白く石の短文はマツ秋からうの  
億ですが冬枝水の野に在つて  
自然を友として其然人生の歡  
喜を見出さんとする詩人の  
面影がよくこのはれるので特  
にニに発表したとかがです。

初春の歌

在日本 河野紫水

雪の消えた山の林に坐ると  
かたての芽がそららの枯草を破  
降る様に注ぐ太陽の光に  
あきさ速く私の心は飛ぶ  
若い生命は今土がうのぞいて

ミの偉大な壯麗な初めを思ふ  
驚ろき讚美する無限の魂  
みにくさとひれつさうな世界だ  
私は愉快なうです  
太陽と枯草と芽と蒼空とは  
私の心をまだ若さに返し

喜びに満ちて歌を歌ふのです  
山の林がこんな愉快なものと  
どうして今まで知らなかつたんだ  
うら  
たのしい力強さを抱きしめて  
私は速くの女を想つてみた。

○うらはれま真夏の春はたりしかり  
長きニフの影のそつれフ。  
○しめやかに降る春雨に若葉葉  
えしみくくと知る春のたよひ  
○壺たげに水ロリと落ちし寒椿の  
あわい吐息に春融けて行く。  
在日本 河野紫水

れる程それ程遠く文藝的思想が退  
歩してゐるか未だ幼稚であるか  
先にも言ふまじいと思ふことゝ平  
氣で公言する氏の心事が何とな  
く悲しく思はれるから次に私の意  
の断片を書いて見たい

文藝は自己満足だ。或はそうて  
あう。又そうでない。人間の  
真幸福は自己満足の中により多  
く見出せる。人間のなしてあるこ  
と一つとして自己満足ならざるこ  
つがあらう。少し極端だが、是れ  
でさへも多くの場合彼等のため  
には自己満足なんだ。

唯社會生活は孤立生活でないか  
ら自己満足が社會を毒し人を  
その場合には之を容れな  
い。このことだ。又これはならぬ  
だ。

然し「文藝に依る自己満足」が果し  
て横兵隊の言はるゝが如く排外  
べきものであらうか、自己のあ  
たしき生活、世のさかひから  
暫しのがれて文藝の境地に自  
己の心を慰はうことが下うめこと  
なのであらうか、自己満足は希  
ふの情が (次頁二段へ)

『新編三段文藝春秋のフジ』  
域烈であれはあつただけその人の仕事  
には油が乗つてくる。文藝に於ては又  
やうである。

『下らぬ文藝』の横武氏から聞か  
されることは意外である。一人の全  
ことに對して『下らぬ』と批評し去  
る様な人に文藝上の批判の持合  
せはまづないのであらう。

他人には下らぬと見えることと自分の本  
人には下らぬこととあるか。知れぬ。否  
『下らぬ』と云つて居ればこそ之  
を為すのだ。世の中に誰が下らぬこと  
を好んで為す者があつたか。

『下らぬ』高貴にしてあることと云は  
れて快意を覚える様な男があら  
とすればよく、の死物か。な  
くは聖人かく自覚ある普通人ではあ  
るまい。

他人に下らぬことと見えることと本人には下  
らぬこととあるか。知れぬ。他人のなす  
こととは何ぞと彼で下らぬことに見え  
てお氣に召さぬらしく思はれる横武  
氏は自己催眠にかつてある人によくみ  
られる様なお方である。

氏御自身も随分色んな名も用ひ

て様々なことをお書にふるが、ど  
も拝見して二千遍、思慮の閑  
きと大してなげれば、個性の現はれ  
る少く言はば一種の念佛でも聞か  
される様な気がしてなうぬ。

かく言へば氏は怪しからんとあつし  
やるか。知れぬ。然し我々には決して  
氏に向つて『下らぬ』と云ふお書さ  
なるとは申し上げぬ。何故なら横  
武氏自身には確かに大いに下らぬこ  
とであらうから。

他人の文藝作品に向つて『下らぬ』と  
言ふ様な大それた言を吐く人は先  
づ自ら大いに下らぬ作品を發表して  
然る後に言ふ可きことである。解  
しその後に言ふ場合と自ら下らぬ作  
品といふ様なことを口外すること  
は決して聞きいふことではあない。

先日七子さんの詩は現代人の青い吐息の  
様に思ふと云つて来たが、中々面白  
い言だと思つて同感である。  
歌と詩と文と結局は吐息のな  
だ。それは生きてある證據なんだ  
死人に何の吐息も何の文藝もぞこ  
んなことと考へて見た。

現代人の吐息が青いこととあれば赤い  
と白いこととあらう。それはその人の

境遇生活様式に依つて違ふのは洵に  
當然だから、ブルジョア文學、プロレ  
タリア文學の分れと結局はそこから出  
発してあるのだ。ミミラを考へてみた

吐息が青からうが赤からうがその人に  
とつては可愛いのだ。又それでは、  
だ、自分の吐息が可愛いは徒らに  
他人の吐息を『下らぬ』とは笑はない  
同人が自まぐるしい人生の戦線場で  
うした吐息も集めた文藝附録  
同人各々吐息を吐いたものだ。

その吐息も横武氏の様な立派な人  
には下らぬことであるらしい。併し我々  
は吐息を吐くには生きて行けぬ  
生活の渦中に在ること自覚して  
あるから他人に下らぬが下らぬまいが吐  
息を吐くさうには居水ない。

他人に吐息を吐くさうなところは死んで  
しまふと、人になる。人の吐息は  
きらいで、なあるならば、  
かめ定のことだ。

今は冬だ。在聖邦人文藝界の冬の感がある  
春の訪れと共に花が咲けば、がと待つて  
ある。私には文藝の花を見ることは決  
して下らぬことではないから。